

(第3号より続く)

中国語の近代語彙の形成

F. マシニ

1. 4 広州から北京、上海へ

1.4.1 プロテスタント宣教師と太平軍の翻訳

外国を制するには、何よりもまずその事情を知らなければならない。外国の事情を知るにはまず翻訳局を開設して外国書を翻訳しなければならない¹。

魏源が第1次アヘン戦争後に書き記したこのくだりは、1840年代初頭林則徐が発言した内容と思われる(§1.3を参照)。しかし、その後20年近くも、林の指摘は注目されることはなかった。1862年になってようやく中央政府は、北京に西洋言語の教授と外国書の翻訳を行う最初の近代的な学校を開設した。この措置は、初めて西洋の思想と概念が中国語により系統的に紹介されることを確実なものにした。

1840年から1842年までの間、政府の高官は西洋の事物にあまり興味を示さず、朝廷は依然として中国における外国勢力の拡大を阻止することに躍起になっていた。この孤立した時期は、諸外国が中国の重要な貿易都市に租界地を設立することによって、ようやく終りを告げられた。これらの租界地は、イギリス、フランス、アメリカの3ヶ国に押しつけられた条約に基づいて設置されたものである。その後、外国の商人や貿易業者が次々と租界地や当時はイギリスの植民地であった香港のような新しく開かれた貿易港に入り、居住した。多くの宣教師(特にプロテスタントの宣教師)もこれらの都市にやってきて、19世紀の初頭に、広州で始めた布教活動をこの地でも展開した。この時は以前よりずっと自由で、費用も多く投じられた。

プロテスタントの宣教師が執筆、或いは翻訳した書物は、中国語に及ぼした西洋の影響を研究する上で、極めて重要である。§1.2と§1.3において、われわれはすでに初期の宣教師たちが広州で出版した書物について言及した。その中でモリソン、ミルン、メドハースト、ブリッジマン、ギュツラフらの仕事は、特に広く知られていた。

1867年、ワイリーが、上海で無署名の本を出版した。書名は *Memorials of Protestant*

¹ 『海国図志』巻二、110~111頁

missionaries (『プロテスタント在華宣教師回顧録』)である。ワイリーは本の中で、モリソンが広州に來航した 1807 年から 1842 年までの間にプロテスタントの宣教師たちは中国語で 100 点以上の書物(翻訳書と著書)を出版したと述べている。ワイリーはさらに 1850 年代後半までに、266 点以上の書物が出版されて、うち 253 点は官話で書かれたものであり、残りのものは幾つかの南方方言で書かれたものであると述べている。ワイリーの本が出版された 1867 年までに、プロテスタントの宣教師による書物は 777 点世に送られた。そのうちの 187 点は方言で書かれたものである²。

初期の宣教師は豊富な著作を残した。ギュツラフは中国語で 61 点(文章と著作)を、メドハーストは、59 点を、ミルンは 21 点を執筆している。1867 年までに出版された 777 点の著作のうち、474 点は中国の官吏がまったく興味のない布教用の書物で、聖書、教義問答録、道德箴言集、神学論文集などを引用・抜粋したものであった。1855 年以後、宗教に関係のない書物が 100 冊近く出版されたが、1854 年以前は、地理、歴史、政治、経済に関する著作はたった 13 点しか出版されなかった³。§1.3 で述べたように、地理に関する著作の内容は『海国図志』の基本的な部分をなしていたため、プロテスタント宣教師が活動した狭い地域以外にも広がったことになるが、それ以外の宗教的な書物に関しては、宣教師が直接布教を行った地域以外で読まれたかどうかを推定することは非常に難しい。

プロテスタントの宣教師が出版した布教書の普及状況を分析する前に、医学の分野におけるかれらの貢献について、述べておくことは有益であろう。医学は 19 世紀前半、プロテスタント宣教師らを取り上げた知識の中で、唯一一定のレベルに達した学科であった。

1805 年、東インド会社の外科医、アレクサンダー・パーソンが数人の中国人に種痘した。そして、彼は、*Treaties on the New English Methods of Vaccination* と題する 7 葉の小冊子を書いた。同じ年、ジョージ・スーダードンはこの小冊子を中国語に訳し、『暎咭喇国新出種痘奇書』という書名をつけて広州で出版した⁴。1820 年、モリソンは東インド会社の同僚で、外科医のジョン・リヴィンストン(李文斯敦)といっしょに、マカオに最初の西洋式の病院を設立した。「太医院」にちなんで、「医院」と名命した。それ以来、「医院」は、中国では各種の病院を指す名称として用いられるようになった。

² これらの著作は、上海方言によって書かれたものが最も多く、56 点あり(内 3 点はローマ字表記である)、続いて官話(41 点)、寧波方言(36 点)、福州方言(23 点)、広州方言(14 点)、廈門方言(12)、客家方言(2)、潮州方言、金華方言、杭州方言各 1 である。ここの数字は T sien 1954 : 311 と異なる。T sien は、ワイリーの研究に基づいたもので、合計 795 点と数えている。内訳は官話で書かれたのが 578 点で、各種の方言で書かれたのが 217 点である。

³ Chang His-tung 1950:8-9 は、1852 年までに 12 点しか出版しなかったとあるが、私は、ミュアヘッドの『地理全志』(1853-54)を入れて、13 点とカウントしている。

⁴ Wylie 1867:186、Coates 1966:104、Britton 1933:35

1851年、イギリス人の医者ホブソン（合信）が、広州で『全体新論』10巻を出版した⁵。この書は、生理学（「全体」）という新しい学問に関する知識を紹介するもので、意識の形で生理学と解剖学の単語をはじめて中国語に訳出している。例えば、「大脳」とそのペアの語「小脳」である⁶。1626年までに、ジャン・シュレック（別名 Terrentirus=鄧玉函）は、杭州で『泰西人身説概』（西洋科学に基づく人体解剖学の概説書）を編纂したが、刊行は1643年であった。この書を除けば、『全体新論』は、漢訳された唯一の西洋医学の著書であり、後に、プロテスタントの宣教師が上海で出版した他の医学書もこの本に負うところが大きかった⁷。『全体新論』は日本においても広く知られており、1857年、和刻本も出版された⁸。

ホブソンはまた1855年広州で『博物新編』を出版した。この本は、科学・天文学・博物学の3つの部分から成っている。その第2部『天文略論』は、1849年にすでに出版されていた⁹。科学に関する第1部は、次の章で構成されている。地気論、熱論、水質論、光論、電気論。『博物新編』は近代、中国語で書かれた最初の科学書の1つと言えよう。本書の中で化学と電気に関する知識がはじめて紹介された¹⁰。

前節において指摘しているように、宣教師の雑誌や書物の中に含まれている地理学や政治学の知識は、すでに中国の官僚の興味を引いていた。1854年以後、宣教師と中国の文化人が協力して技術と科学に関する著書を出版した。

しかし、一般的に言えば、魏源が利用した一部の地理と歴史の書物以外に、中国の文化人は、プロテスタントの宣教師が漢語で出版した著書に対してそれほど興味を示さなかった。このような状況は19世紀半ばまで続いた。中国の文化人が外部の世界に疑念を抱くことはむしろ当然であった。その上、彼らは宣教師の書物は文章が非常に悪いと感じていた。徐繼畬は、『瀛環誌略』の序文の中で、プロテスタント宣教師の中国語の著述に対して次のように論評を加えている。

西洋諸国の地理、歴史、物産、国内事情に関する知識はどれも西洋人の書物から得ている。いろいろの書物に印刷のものや手書きのものがあり、雑誌新聞の類も数十種ある。その文章の大半が低俗で通じない。ただし、事実はほぼ信用できる。……西洋の人、例えばマテオ・リッチ（利瑪竇）、アレニ（艾儒略）、フェルビースト（南懷仁）らは都に

⁵ Wylie 前掲書 126 頁。『全体新論』は1852年『海山仙館叢書』第120巻に収録された。この叢書は藩仕成によって編纂されたものである。『中国叢書総録』巻一、184頁。

⁶ ホブソンの書で使用されている医学用語は、彼の『医学英華字釈』（1858）に見ることができ、Doolittle の『英華萃林韻府』（1872）Ⅲ300～307頁にも部分的に収録されている。

⁷ Bernard 1945:nos.141, 335, Rosner 1991:272～287

⁸ 実藤恵秀 1970:3頁

⁹ Wylie 前掲書 126～127頁

¹⁰ この分野の漢字学術用語の語源に関する詳細の分析は、§1.4.3、§1.4.6 参照。

長く住み、中国語を通じたので、その著書も文章が頗る正確で分かりやすいが、誇張したり、虚言をしたりして信用できない内容も少なくなかった。一方、最近の西洋人は漢文に精通するものがない。そのために文章の多くは低俗で品位がない。しかし、各国の歴史などに関する記述は事実に基づいている。前者（マテオ・リッチら）より後者の文章は素朴である¹¹。

中国の官僚たちはプロテスタント宣教師らの宗教的な著述に対して、顧みようとしなかった。これは別に理解できないことではない。宣教師らの地理や歴史に関する著述が一部の中国文化人の注意を引いたのは、疑う余地のないことだが、しかしプロテスタントの宣教師たちが、最初の中国人信者を獲得したのは彼らの多くの宗教書によるものである。一部の官僚は確かに朝廷と文化人の中で西洋に関する知識を伝えた。しかし初期信者の本来の使命は、福音を中国全土に伝えることであった。キリストの福音は活躍していた2人の広東の信者により、まもなく発生する太平天国の中心人物らの耳にまで届けられた。中国人の間で宗教書を配る梁阿発と Kew Agang の初期の活動について¹²、その詳細を知るには、われわれはもう一度ワイリーの記述に立ち戻らなければならない。ワイリーは次のように書いている。

同じ年（1830）、Kew Agang は梁阿発と一緒に中国の内陸部を 250 マイル以上回り、彼らの同胞にキリスト教の知識を教えた。自ら執筆し、印刷した宗教の小冊子を配った。西南の地域に行く途中、2人は政府の試験官の一行に加わり、一緒に移動した。これにより、2人は自由に若い文人に接触することができ、彼らに重要な内容を持つ小冊子を 7000 冊以上も配った¹³。

初期の宣教師たちの書物が科挙の受験者にどのような影響を与えたかについて、知るすべもないが、しかしながら数年後、1833年、または1834年に科挙試験を受けた、洪仁坤という受験者は梁阿発著の『勸世良言』を所持していた。彼は科挙の試験に落第したが、その後、洪秀全と名乗り、太平天国の指導者になった¹⁴。

洪秀全のいところによれば、洪秀全は最初これらの宗教の小冊子にそれほど興味を示さなかったが、1843年もう一度読み返したとき、以前の宗教的幻覚を確信するに至った。彼は自分がゴッドの次男で、キリストの兄弟だ。ゴッドの意を受け、偶像崇拜の横行していた中国

¹¹ 『瀛環誌略』巻一、凡例

¹² Kew Agang（漢字表記が未詳）は梁阿発によってモリソンに紹介された。1830年、モリソンは彼のために洗礼を施した。梁阿発に関しては § 1.2、1.3 を参照。Kew Agang と梁阿発の詳細な伝記に関しては、ワイリー前掲書 11～12 頁、21～25 頁参照。

¹³ ワイリーが言及している宗教の小冊子は、梁阿発は 1819～1829 年の間に書いた伝道書と考えられる。ワイリー前掲書 22～25 頁参照。

¹⁴ 洪秀全、太平天国およびキリスト教がこの革命運動に与えた影響について、Boardman 1952 参照。

をゴッドの教えに導く使命を背負っていると信じた。1847年、洪秀全はプロテスタントの牧師ローバツツ（Issachar Jacob Roberts、羅孝全）の下で数週間教育を受けた¹⁵。その時初めて中国語版の聖書を読んだ。これは、ギュツラフが1835～1838年の間に翻訳したものとされる（§1.2 参照）。

太平天国の乱は上記の書物だけでは捉えきれものではないが、太平天国が刊行した宗教書の用語に対する宣教師の布教書の影響について注意する必要がある。

1853年、洪秀全の率いる太平軍が南京を攻め落とし、1864年までに続く太平天国を樹立した。南京占領後、太平天国はすぐにキリスト教の書物を数種類出版した。その中にプロテスタントの宣教師たちが最初に使用した用語が含まれている。

たとえば、バイブルを表す言葉は、ギュツラフの中国語訳の聖書から取り入れたもので、太平天国軍は、旧約、新約聖書を「聖書」という語の後に「遺書」を付けた形で、呼んでいた¹⁶。また「天国」という語で自分たちが樹立した政権を呼んでいたが、これはギュツラフが訳した「マタイの福音書」に見える天国=kingdom of heavens に由来していると指摘されている¹⁷。同じくギュツラフの漢訳聖書から取り入れた訳語に「福音書=Gospel」「甜露=biblical manna」「安息日=the Sabbath」などがある。

しかし、太平天国の間広く用いられていたこれらの宗教用語は、また運命を太平天国と共にし、太平革命が失敗した後、まもなく跡形もなく消えた。このことから、現代中国語の語彙に対する太平天国の出版物の影響は、極めて微少なものであると言えよう。興味深いことは、この時期に作り出されたいくつかの新しい表現形式は、19世紀末、あるものは1949年以降、ようやく普及したことである。

太平天国の布告は、直接中国南部の農民や漁民に発せられたもので、秘密結社や仏教信仰といった民衆の習慣、信仰に従っていた。朝廷の官僚は、太平軍の指導者を粗野で無知な輩と見ていた。ひいては、その布告の受け手である群衆よりも粗野で無知だと考えていた。なぜなら、太平天国が偶像崇拜に反対する民衆への布告や書籍の中で用いた文体は、公式文書の格式ある文体とは、似ても似つかぬものであったからだ。

太平天国はプロテスタントの宣教師が作った宗教用語や広東、広西の客家、壮族が話している方言的表現を取り入れた¹⁸。彼らはまた、典型的な秘密結社の用語を用いたり、自ら新しい用語を作ったりした¹⁹。しかしながら彼らの最も重要な言語改革は漢字に対してであっ

¹⁵ ワイリー前掲書 94 頁

¹⁶ 後に 1853～1854 年に刊行された漢訳聖書（いわゆる委辦訳本）は、書名に「約」を使用している。§ 1.2、Boardman 前掲書 57 頁注 17 参照。

¹⁷ Boardman 前掲書 86 頁

¹⁸ 史式 1984:1 頁

¹⁹ 史式 1963 参照

た。太平天国の布告は主に、ほとんど教育を受けたことのない民衆を対象にしたので、下層社会で広く用いられていた簡略文字を多く用いた。簡略字は無学のしるしと考えられていたので、ふつう作られてはやがて消える運命にある文字であった。彼ら自身の名称：「太平天国」について言えば、「國」に代えて、「国」を用いた（これはいま中国の簡化字「国」とは完全に同じではない）。太平天国は、文字の数を減らすことも試み、いくつかの同音字や異体字を1つの漢字にまとめようとした。この方法はすでに広く用いられていたものの、異体字を同化させることは無知の表れだとする国粹主義者の猛烈な反対に遭った²⁰。

太平天国は2つの句読符号（読点“、”句点“。”）の普及についても貢献した。彼らはまた、人名の横に一本線を付け、地名の横に二本線を付けることを広めた。実際にはこの方法はすでに用いられていたが（外国に関する著作の中に、これらの記号を見ることができる。例えば、地理に関するイエズス会の著作の中では、外国の人名、地名の音訳語が混在しているため、この方法が用いられている）、しかしより広く、速く普及できたのは、太平天国の採用に負うところが大きい²¹。

『欽定軍辞実録』という太平天国の文書の中で、難解な古典的表現の使用をやめ、口語を基礎とした文体を採用しなければならないことが強調されている。

飾り立て過ぎたり、浮薄であったりしてはならず、ただ敬虔な心があれば、古典の言葉は必要ない²²。

太平天国の運動は言語の面を含め、疑いなく革新的な可能性を有していたが、朝廷の軍隊と地方の武装勢力によって鎮圧された。1860年から1864年の間に、太平軍はついに曾国藩に滅ぼされた。曾国藩は、中国で有名な「同治中興」（1861～1870）の時期に重要な役割を果たした人物である。

1.4.2 早期の外国語学校

英仏連合軍の勝利と第一次太平軍鎮圧の失敗の後、1850年代末、北京は短い期間だが外国の軍隊に占領された。衰退した清王朝に新しい活力を注入する必要があることに気づいた一部の進歩的な学者は、ある程度、西洋のやり方を取り入れて、伝統的な体制を改革し、新しい機構を築かなければならないと主張し始めた。

1861年1月13日、恭親王（奕訢）、桂良、文祥らは、北京に「総理各国事務衙門」を新設したい旨の上奏文を皇帝に提出した。これは近代中国の最初の外交部であった。この役所は設立されてまもなく、西洋に最初の外交使節団を派遣した。

²⁰ 史式 1963 参照

²¹ 史式前掲論文を参照

²² 金毓黻・田餘慶編『太平天国史料』71～72頁

同じ上奏文の中で、林則徐が20年前に出した要望がもう一度取り上げられた。

広東、上海から2名ずつ北京に派遣し、諮問に備えるよう要請する。外国と交渉するにあたって、まずその事情を知る必要がある。言葉が通じず、文字が理解できず、意志疎通ができない現状では、外国に妥協を望むことができない。かつて、ロシア語を学習するために設立されたロシア語学校は、非常に意義のあるものだった。しかし、いまは形式ばかりのものとなり、ロシア語に通じなくなった。外国の情報を得るために外国語の学習を奨励するほうがよいと思われる。広東、上海の商人に、イギリス、フランス、アメリカの言語を専門に習っている者がいると聞いている。両省の総督、巡撫に誠実で信頼のおける人物を各省から2名ずつ、計4名を外国の書物を持参して北京に派遣し、それと同時に、八旗から、年齢が14歳以下の優秀な人物を選抜し、学習させるよう勅命を賜りたい。派遣された者は、ロシア語学校での例に倣い、報酬を優遇する。2年後学習の成績を調べ、優秀者には奨励と資格を与える。八旗の学生は外国語を習得すれば学習を終了させる。ロシア語についてもロシア館に規則を整備し、真剣に監督するよう勅命を発してほしい。外国語を学習する者に対して、技能の低下を防ぐため、精通す留者に奨励を与えるよう要請する²³。

1858年、中国とイギリスの間で結ばれた『天津条約』は、1860年に正式に発効した。この条約においても言語の問題が取り上げられた。19世紀に中国と衝突した外国の言葉に精通し、かつ信頼できる通訳を持つ重要性が強調されている。この条約の規定によれば、イギリスからの外交文書は全て英語を使用することになっている。ただし、中国が独自に英語を翻訳できるまで、中国語の翻訳を添付するということであった²⁴。

「西洋言語の通訳は広州、上海から召集すべきだ」という恭親王の提案は、北京には西洋の言語に精通する者がいなかったことを物語っている。さらに大きな外国人コミュニティを持つ広州と上海でさえ、英語、フランス語を自由に操る人はいなかったようである。恭親王の建白は、外国語の言語、習慣に関する実際的な知識を中国語に翻訳するにはまだ遠い道程があることをはっきりと示している。中国の文化人は誰一人として身分を落として蛮夷の言

²³ この上奏文は、『籌辦夷務始末』巻七 2674～2680頁に収録されている。

²⁴ 《天津条約》第50款は、「今後、英国の書類はみな英語を用いるものとするが、しばらくは中国語訳を添付する。中国から学生が派遣され、英語を習得した時、中国語訳を添付する必要がなくなる。以後、文言に対して異議があるところ、イギリスは、英語バージョンを正式文書とする。今回の条約も、この方法に従って中国語、英語の本文に食い違いが無いかを詳細に照合する」とある。『籌辦夷務始末』巻二八 1022～1023頁。また、Martin 1896:295、Biggerstaff 1961:97～98 参照。同書の注釈12で、Biggerstaffは、1945年から1946年の間、重慶のアメリカ大使館で、中国語通訳に携わったとき、実際にこのような方法が行われていたと述べている。確かに、このような方法は、現在でも用いられている。北京のイタリア大使館では、「非公式」と注意書きされているが、中国外交部宛ての全ての書類に、中国語訳を添付している。

葉を学習しようとしなかった。したがって外国人との交渉は、現地の身分の低い人たち（そのほとんどは広東の出身である）を通して行われた。彼らは 19 世紀初頭、広州で活動していた“通事”たちの子孫で、外国人との交渉に様々なビジン英語を使用していた。

上海在住の翰林院編集、馮桂芬（1809～1874）は、ある文章の中で、中国の役人が外国人との交渉に当たって全て“通事”たちに頼っている現状を次のように嘆いている。

昨今、通商は時の政治の一つになった。外国人と交渉せざるを得なくなった以上、外国人が何を考え、何を使用とするのか、その虚実を知らなければならない。そうしてはじめて、正確な対策を立てることができる。しかし通商を始めて 20 年経つが、外国人のリーダの中に、中国の言葉を習う者が多く、その優秀な者は中国の典籍を読むことができ、中国の政治制度、行政、社会民等に詳しい。しかし、中国の官吏、紳士の中にそのような人物は皆無であった。それゆえ、外国との交渉事がある度に、いわゆる通事という者に頼らざるを得ないが、彼らは外国交渉にとって大きな害である。上海では通事の数が多く、大きな利益を得ており、土農工商の他に、もう一つの職業を成している²⁵。

馮桂芬は、上海と広東にも外国語を習い、外国書を翻訳することを目的とした学校の設立を提案した。

一方、外国人コミュニティでは状況が、全く異なっていた。プロテスタントの宣教師たちがまず着手したのは中国語に関する体系的な研究であった。彼らの後に従い、アヘン戦争後多くのヨーロッパ人が、中国の言語、文化について研究を始め、近代中国学の濫觴を開いた。言及すべき人物として、レグ（理雅各 1814～1897）、ウエード卿（威妥瑪 1818～1895）、マーティン（丁韞良 1827～1916）の名をここに明記する。清王朝は外国人コミュニティから外国語の教師を招聘するより他に選択肢はなかった。

外国語を習い、外国との交渉に従事する専門家を養成する中国最初の近代的学校は、1862 年 8 月 29 日、北京に開設した。学校は「同文館 School of combined learning」と命名された²⁶。英国人のプロテスタント宣教師、ジョン・ショー・バードン（包爾騰）が中国最初の英語学科を担当していた。そして、彼の後をジョン・フレイヤが継いだ。フライヤは、後に上海製造局附設の翻訳館の創設に大きな役割を果たした人物である²⁷。1863 年、前のロシア館は同文館に合併され、フランス語、ロシア語の部門が設置された。学生は 10 名ずつであった。オランダ人の宣教師が最初のフランス語の授業を行った²⁸。

²⁵ 馮桂芬「上海設立同文館議」『校邠廬抗議』収 211 頁。

²⁶ マーティン 1896:301

²⁷ マーティン前掲書 296 頁

²⁸ 同文館の設立については、Biggerstaff の前掲書、及び 1934 を参照。特に、北京同文館については、マーティン 1896:293～327 頁を参照。

1863 年清王朝は李鴻章の提案を受け、上海、広州に同文館を設立することを許可した²⁹。1869 年、上海同文館は、上海に設立されて間もない江南機器製造局 (Jiangnan Office for the Construction of Machinery) に合併され、後に「滬局」という名前で広く知られるようになった。一方、広州同文館は 1864 年に開設されていた。これらの学校は、当初は外国語の授業だけであったが、後に自然科学分野の授業も行った。

同文館は当初、外国語だけのために設立された機関であったが、その後、次第に自然科学の科目を開設した。1867 年、総理衙門は皇帝を説得し、保守的官僚の反対を押し切って、北京同文館に天文館と算学館を開設した。同年、同文館は化学の教授にフランス人のプレクイン (畢利干) を雇い、政治経済学および国際法の教授にマーティンを任命した (彼は 1864 年から同文館で英語の教師をしている)。1869 年、中国人の李善蘭が数学の教授に任命された。マーティンは、同年 11 月 26 日に同文館の総教習 (校長) に就任した³⁰。一方、上海と広州の同文館は非常に早い時期に、数学科を開設した。保守的な官僚は、伝統文化の内容に含まれていないとの理由で学科の設置に反対していたが、しかし西洋の数学は、明末から清初にかけてイエズス会宣教師によって紹介されて以来、すでに中国の学問と見なされるようになっていた。

言語学的に見れば、3 つの同文館は重要な役割を果たした。北京同文館は、翻訳者と通訳者の養成で特に有名であり、卒業生は第 1 次中国遣欧使節団に同行して西洋諸国を訪問した。本書の § 1.4.4 で述べられているように、彼らが書いた紀行文は、近代中国語の語彙の形成及び普及に関する研究にとって貴重な資料である。前述した同文館の学生から後に数人が外交官となり、外国で中国の代表を務めた。

北京同文館と江南製造局 (上海同文館は、広方言館の名で同局に附設された) は、その翻訳書を通し、中国語の語彙に大きく貢献した。

²⁹ Biggerstaff (1961:157、注 3) は、李鴻章の建白書に対して発せられたこの勅令は、広東同文館についてのみ言及したものであるが、上海、広州の両地に同文館の設立を許可したものと解釈されたと指摘している。

³⁰ 李善蘭の伝記は、以下の文献に見ることができる。『清史稿』294 卷 14011~14013 頁、『清史列傳』69 卷 72~73 葉、『碑傳集補』43 卷 1513~1515 頁、Hummel1943:479~480、北京同文館時代の李善蘭については、洪万声 1990 を参照。李善蘭の上海での翻訳活動については、§ 1.4.5 を参照。マーティンと同文館の関わりについて、マーティン前掲書 293~294 頁、Biggerstaff の前掲書を参照。

参考文献

『海国図志』60 卷本、台湾成文出版社復刻版、頁数はこれに従う。

Tsien, Tsuen-hsuei, "Western Impact on China through Translation", in *The Far Eastern Quarterly*, XIII, 3, May 1954, 305-327.

Wylie Alexander, *Memorials of Protestant Missionaries to the Chinese: Giving a List of their Publications, and Obituary Notices of the Deceased, with Copious Indexes*, American Presbyterian Mission Press, 上海1867. 復刻版、成文出版社1967

Coates Austin, *Macao and the British. 1637-1842 Prelude to Hong Kong*, Routledge & Kegan Paul Ltd., London 1966. 復刻版 Oxford University Press, Hong Kong 1988.

Britton Roswell S., *The Chinese Periodical Press, 1800-1912*, Kelly & Walsh, Limited, 上海1933. 復刻版、成文出版1976.

Bernard Henri S. J., "Les adaptations chinoises d'ouvrages européens, bibliographie chronologique depuis la venue des Portugais à Canton jusqu'à la Mission française de Pékin, 1514-1688", *Monumenta Serica*, X, 1945, 1-57 and 309-388. 収 へ へ

Rosner Erhard, "Le Développement de la Terminologie Médicale Moderne en Chine", *Chine et Europe: Évolution et Particularités des Rapports Est-Ouest du XVI^e au XX^e Siècle, Actes du IV^e Colloque International de Sinologie de Chantilly*, Paris 1991, 272-287. 収

実藤恵秀『中国人留学日本史』(増補版)、くろしお出版社 1970 年

Boardman Power Eugene, *Christian Influence upon the Ideology of the Taiping Rebellion, 1851-1864*, University of Wisconsin Press, Madison 1952

史式『太平天国詞語匯釈』四川人民出版社 1984 年

史式「太平天国の文字改革」1963 年、『太平天国史稿』文海出版社、台北 1978 年収

金毓黻・田餘慶編『太平天国史料』開明書店、上海 1950 年、復刻版、中華書店 1955

W. A. P. Martin, *A Cycle of Cathay, or China South, and North*, Fleming H. Revell Company, New York 1896

Biggerstaff Knight, "The T'ung Wen Kuan", *Chinese Social and Political Science Review*, XVIII, 3, 1934, 307-340. 収

--- *The Earliest Modern Government Schools in China*, Cornell University Press, Ithaca, New York 1961.

馮桂芬『校邠廬抗議』1861 作者自序、復刻版、文海出版社 1981

Hummel Arthur W., *Eminent Chinese of the Ch'ing Period*, United States Government Printing Off., Washington 1943, 2 vols. 復刻版、成文出版社1970

洪万声「同文館算学教習李善蘭」、『近代中国科技史論集』楊翠華・黄一農編、中央研究院近代史研究所、台北 1990:215-259 頁